

梶山女学園大家政[○]山中みどり 並木和子

目的 合成洗剤は、ハード型 (ABS) からソフト型 (LAS) へと移行し、生分解性の増加という点では一応の効果が得られているが、現在もその毒性については色々の角度から検討されている。我々は、食器用洗剤として用いた場合における食器への残留を、家庭および集団給食施設などで使用される食器類を用い、材質および使用状況による洗剤残留性について検討した。

方法 食器としては、ガラス、磁器、陶器、アルミニウムおよび合成樹脂製のものを用いた。学生を対照にしたアンケートの結果、各家庭での洗剤の使用手法に可成りの相違が認められたので、予め洗剤の使い方、すすぎ方について検討したのち各種食器の残留性を調べた。洗剤の定量はメチレンブルー法を少し改良した方法で行なった。また、食器の表面状態を走査型顕微鏡を用いて観察した。

結果

1. 食器材質としては、木製、陶器、軟質の合成樹脂製食器の洗剤残留が、顕著であった。
2. 使用状況では、上記のような洗剤残留性の大きい食器を多年使用したものに特に残留が大きく、またくり返し加熱処理による影響は、電子レンジ加熱で洗剤残留量の増加するものがあった。